

学界の動向

第 49 回日本核医学会学術総会報告

油 野 民 雄*

平成 21 年 10 月 1 日（木）～3 日（土）、旭川市民文化会館と旭川グランドホテルを会場として、第 49 回日本核医学会学術総会と第 29 回日本核医学技術学会総会学術大会を合同開催した。

これら二つの学会の合同開催は、前年の千葉市幕張メッセでの開催から実現したものであり、今回が二回目である。合同開催のメリットは、核医学診療（がん、脳血管障害や認知症を含む脳神経疾患、心臓疾患、その他の疾患などラジオアイソトープを用いた診断と治療）に従事する医師と技師、および関連する臨床医学・分子生物学・生化学・数学・物理学・工学・薬学・情報科学・予防医学といった幅広い分野の研究者などの関係者が一堂に会して、核医学の更なる発展に向けた実りある議論ができることである。開会式では、「核医学医師と技師とのフュージョン」を念頭に、日本核医学会学術総会会長の油野民雄と高橋正昭・日本核医学技術学会総会学術大会会長（中村記念病院）とが、それぞれ「核医学診療歴 37 年の出会い」と「合同開催にあたって～30 年の技師生活を振り返ってみると～」の講演を行い、核医学の更なる発展には核医学医師と核医学技師の密接な協力関係が不可欠であることを強調した。

今回の合同開催のメインテーマを「核医学－再発見と技術革新」とした。分子イメージングや CT や MRI の形態画像と PET や SPECT の機能画像とのフュージョン（融合）といった最新的话题を取り上げるとともに、PET 検査が脚光を浴びている一方で施行頻度がやや減少した感を抱かせる SPECT 検査の有用性を再強調できるようなテーマも取り上げた。また、次代の核医学を担う後継者の育成に繋げる意味で、将来有望な

若手核医学医師のなかから六名を選び、領域を定めずに、現在取り組んでいる研究を自由に発表してもらいシンポジウムを企画した。さらに、日常の核医学診療で最も多く使用されているラジオアイソトープは Tc-99m であるが、昨今の世界的な Tc-99m 供給の逼迫状況を受け、「Tc-99m 製剤を用いる核医学診療－クライシスから学ぶ教訓と今後－」の緊急合同ワークショップを急遽開き、Tc-99m 安定供給の問題に関する注意喚起を行った。

一方、今回の合同開催が地方都市である旭川で行われたことから、「旭川からの情報発信」をテーマとして二つの特別講演を企画した。旭山動物園の小菅正夫名誉園長による「地球環境と動物－地球危惧種の保存と旭山動物園の取り組み－」と、本学の吉田晃敏学長による「ICT と医療の融合」である。「地方から全国への、更に全国から海外への情報発信」のかたちで、将来への生き残りをかけた旭川の取り組みが紹介された。

リーマンショックに起因した世界的不況下および新型インフルエンザ蔓延期に開催された学会であったが、全国から 1,700 名を超える参加者がみられ、また天候にも恵まれ、さらに西川将人・旭川市長による開催都市を代表した歓迎の挨拶も得られ、主催者側としては成功裡に終了したと思っている。

なお学会終了後翌週の 10 月 10 日（土）午後、旭川大雪クリスタルホールで市民公開講座を開催した。「がん診療における核医学～その最前線」をテーマとして、我が国の死因の第一位である“がん”を取り上げた。最初に、市民にとって馴染みの薄いと思われる「核医学」に対して、「核医学診療って、なーに？」という

*旭川医科大学放射線科

タイトルで、核医学の概念を分かり易く説明した。引き続き、「PET-CT によるがんの診断」のタイトルで、がんの画像診断で昨今話題となっている PET/CT を取り上げた。最後に、「ラジオアイソトープによるがんの治療」のタイトルで、放射線治療の一つの方法であ

る内用照射療法を紹介した。今回、40 名近い参加者が得られたが、「旭川市で PET/CT による検診も受けられないのか。」といった質問などが飛び出し、市民公開講座でも主催者側の意図した結果がほぼ得られたと思っている。